

日本社会心理学会会報

207号

発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 広報委員会(担当常任理事:三浦麻子)

2015年9月25日

日本社会心理学会第56回大会へのお誘い

工藤恵理子

第56回大会まで、あと一ヶ月ほどとなりました。

今大会にも多くの会員の皆様に参加、発表のお申し込みをいただきました(口頭発表 109件、ポスター発表 322件、合計 431件、予約参加申し込み数 515名)。今大会の特徴を挙げるとすれば、ポスター発表を希望なさった方が多くいらしたということです。試みに、過去5大会の全個人発表に占めるポスター発表の比率を計算しましたところ、第51回大会から順に、71.6%→68.3%→66.2%→68.4%→67.3%だったものが、今大会は74.7%でした。そのため、結果的に、第55回大会同様、口頭発表の平行セッションは4つとなりました。

ワークショップには6件のお申し込みがあり、すべて2日目に開催されます。下記の通り、どのワークショップへ行こうか迷ってしまうような、いずれもたいへん魅力的な内容です*1。

社会心理学と社会調査法の接点、その相互貢献について考える

超高齢社会における社会心理学の役割(1)

実験結果の再現可能性検証に関する諸問題

「協力の進化」を巡る、次世代の新たな問いとは何か?

消費者行動における「時間」を問い直す

社会的行動の「説明」について考える

1号通信でお知らせいたしましたように、今大会では、初日の夜に懇親会を開かず、2日目のポスター発表の時間(12:00~14:00)に研究懇親会(無料)を開かせていただきます*2。会員のみなさまにとって研究交流を楽しめる場となることを願っております*3。

そして、通常であれば、夜の懇親会が開かれる、初日の個人発表終了後の時間帯(18:00~19:00)に、イブニング・セッションと題して、4つのセッションを開催いたします。社会心理学の研究の最前線から、柴内康文先生(東京経済大学)、稲増一憲先生(関西学院大学)、小林哲郎先生(国立情報学研究所)による「テキスト・マイニング:実践上の課題と展望」、脳科学研究の最先端から、北田亮先生*4(生理学研究所)による「他者理解の神経基盤」、社会心理学研究で多用される分析方法を解説していただく統計手法のチュートリアルとして、清水裕士先生(関西学院大学)による「媒介分析チュートリアル」の3つです。長い一日の終わりのお楽しみ(冷えたビールでの乾杯?)*5を少しでも先に延ばして、ぜひご参加下さい。

さらに今大会では、日本社会心理学会広報委員会の全面協力とご支援をいただき、新しい試みとして、Open Science Framework (<https://osf.io/>)

*1 1号通信では、ワークショップは原則として2日目の最後の時間帯に配置するとお知らせいたしましたが、口頭発表の申し込み数が少なかつたため、2日目の早い時間帯に口頭発表のセッションと並行する形で開かれるワークショップもあります。そのため、結果的に一人で2つのワークショップにご登壇なさるケースがあります。お一人ひとつのワークショップと杓子定規に排除してしまうには、どちらのワークショップの内容もたいへん魅力的であり、また、口頭発表が少なかつたためにプログラムに余裕があつたため、このような形にいたしました。お申し込みの時点で複数のワークショップでの登壇を断念されていた先生がいらつしゃいましたら、たいへん申し訳ありません。準備委員会委員長としてプログラムの充実を優先する判断をしたつもりです。ご批判もあろうことかと存じますが、ご寛恕いただきたく、お願い申し上げます。

*2 2日目のポスター発表者(責任発表者)の方には、ポスター発表の受付でランチボックスをお渡しいたします。

*3 夜の懇親会が開かれないことを残念に思つていらつしゃる方も多くと存じます。そのようなご期待に沿えず大変申し訳ありません。様々な制約がある中で大会の開催をお引き受けしたため、今大会の準備委員会には学外で懇親会を開催する余力がありませんでした。また、学内での飲酒は禁じられているため、アルコールをご提供する懇親会を開催することもできませんでした。大会における懇親会の役割を軽視している訳では決してありません。ご理解賜りますようお願い申し上げます。

*4 北田先生は日本心理学会の今年度の国際賞奨励賞を受賞されました。今回の講演は、日心での受賞講演とは異なる内容です。

*5 最寄り駅の西荻窪、吉祥寺、いずれも飲食店が充実しており、お楽しみいただけると思います。街の規模は吉祥寺側の方が圧倒的に大きく、西荻窪側は、小さなお店が多く、少人数のグループでの探訪に適しています。

に今大会用のスペースを設定し(<https://osf.io/view/jssp2015/>)、みなさまの研究発表に関する資料(例えば、ポスターやスライドなど)を公開できるようにいたしました。Open Science Frameworkで資料を公開するとはどのようなことかをお知りになりたい場合は、まずは上記URLにアクセスしていただくのが一番わかりやすいと思います。公開の仕方については、10月初旬にマニュアルを大会ホームページに掲載し、適宜SNS等でも広報いたします。ぜひご利用下さい。

ところで、会員のみなさまの中には、今回のプログラムの表紙に書かれている東京女子大学の英語表記“Tokyo Woman's Christian University”はWomen'sの誤植ではないかと思われた方もいらっしゃるかもしれません。多くの女子大学の英語名はWomen's Universityとなっているようですが、東京女子大学は、1人1人の個性を尊重するという意味を込めて、敢えて単数形を使っています。その精神に基づいたという訳ではありませんが、今大会では、個人発表を重視し、会員のみなさまがお互いの研究を聞き、大いに語り合うことができる場を作ることを目指して準備して参りました。今大会が、会員のみなさまお一人お一人にとって、刺激のある内容で、研究者仲間とのディスカッションに興奮し、研究上の新たな出会いに満ち、2日目の終わりには、“早く帰って研究しよう!”とお願いいただけるような大会であって欲しいと願っております。

足の便は決してよいとは言えませんが、武蔵野の緑豊かなキャンパスへ、みなさまがそれぞれの研究成果を携えてお越し下さることを準備委員会一同、心よりお待ちしております。最寄り駅の西荻窪駅には、土日は中央線快速電車が停車いたしませんので、くれぐれもお間違いなく!

(くどう えりこ・東京女子大学)

第59回公開シンポジウム「被災地の明日を探る社会心理学」

開催報告

飛田操

日本社会心理学会第59回公開シンポジウム「被災地の明日を探る社会心理学—福島からの提言」は、2015年6月6日(土)にコラッセふくしまを会場として開催されました。参加者は55名ほどでしたが、社会心理学者だけでなく、市民の方々や、行政・報道関係者などにも参加いただき、公開シンポジウムとして開催することの意義が確認された会となりました。

東日本大震災から4年が過ぎました。震災直後は、たとえば、「低線量被ばくが健康被害に及ぼす影響」といったように、医学や物理学・生物学といった専門性からのアプローチが求められる課題が山積していたと思われます。もちろんこれらの課題が全部解消したわけではありませんが、震災から4年過ぎた現在では、たとえば、コミュニティの再生をどうはかるかとか、長期のストレスへのサポートはどうあるべきか、あるいは、いわゆる風評被害はどのように解消できるのかといった社会心理学的な問題が顕在化してきているように思われるわけです。

そこで、今回の公開シンポジウムでは、社会心理学的なアプローチから、被災地の明日について探っていきたいと思っていました。

シンポジウムでは、最初に、村田会長からご挨拶いただきました。次に、司会からシンポジストの紹介をさせていただきました。シンポジストは、水田恵三先生(尚絅学院大学)、松井豊先生(筑波大学)、そして、三浦麻子先生(関西学院大学)の3名でした。

水田恵三先生には、原子力発電所事故のために全町避難を余儀なくされた福島県浪江町のみなさんを対象とした調査の結果についてご報告いただきました(資料 PDF)。多くのご苦勞と困難を抱えながらも、仮設住宅や借り上げ住宅にお住まいの中で、楽しみを見だし、前を向いて歩こうとする町民の方もいらっしゃるご紹介され、町外コミュニティ構想計画の話題を基に、浪江町の方々にとってのコミュニティの持つ力の大きさについてのご報告がありました。

続いて、松井豊先生から、震災直後から災害救助にあたってくださった災害救助者の方々のストレスとそのケアについて、多くの調査結果を基にご報告いただきました(資料 PDF)。看護職、警察官、消防官、行政職、ジャーナリストといった多くの職種の方々が、全国から被災地に救助・支援に入っていただきましたが、また同時に、被災地内と被災外の多くの方が、強いストレスにさらされていたという実態が紹介され、サポートの必要性と方法について提言していただきました。また、地域間、地域内、家族内といったさまざまなレベルで、こころの分断(ひび割れ)が生じている可能性についてご指摘いただきました。

最後に、三浦麻子先生から、被災地食品に対する態度に影響する要因について、4波に渡る追跡調査の結果を基に考察していただきました(資料 PDF)。被災地と首都圏、関西圏では、被災地食品に対する態度が異なること、この被災地食品に対する態度には、放射能に対する不安の強さと放射能に関する客観的・主観的な知識量が影響していること、被災地食品に対する態度や放射線に対する不安は時間が経過してもほとんど低減していないことといった調査結果が報告され、いわゆる「風評被害」の解消の困難さが指摘されました。

休憩の後、会場のみなさまからいただいた質問に、シンポジストから回答していただき、ディスカッションの時間としました。今回のシンポジウムでは、あえて指定討論者はおかず、会場のみなさまからのご質問に答える時間を多く取りたいと思っていました。じっさい多くの方から、多岐にわた



たるご質問をいただき、このテーマに対しての関心の強さがうかがわれましたし、シンポジストから丁寧に回答いただき、充実したディスカッションとなりました。

福島という場所から、このテーマで、公開シンポジウムが開催できたことは、大きな意義があると思えます。お忙しい中、話題提供していただいたシンポジストの先生方に感謝いたします。また、今回のシンポジウム開催にあたり、相川先生には、学会活動担当常任理事の任期を超えて、また、三浦先生にはシンポジストに加えて広報担当常任理事としてもお世話になりました。また、多くの方のお力添えをいただきました。ここに記して、深く感謝いたします。

なお、シンポジウムの動画がインターネットで公開されています(<http://www.socialpsychology.jp/sympo/59.html>)。

(ひだ みさお・福島大学)

公開シンポジウム「被災地の明日を探る社会心理学—福島からの提言」に参加して

風間文明

上野から新幹線でわずか1時間半、福島は小雨模様でした。シンポジウム会場はコラッセふくしま。コラッセという名にはいろいろな意味が込められているようですが、まずはふくしまの方言で「どうぞこちらにお出ください」を意味するそうです。このウェルカムな感じが、福島、よいですね。

東日本大震災から早いもので今年で5年目です。被災地から離れた土地に住む人ほど、日々の生活の中にあつて震災の記憶は少しずつ薄れてきているのかもしれませんが、しかし福島をはじめとする被災地の方たちにとっては、いまだ震災の傷は癒えず、解決されない問題が山積みであります。この時期に、震災に関するシンポジウムを福島で開催することは、人々の記憶を呼び覚まし、改めて問題提起をするのに格好のタイミングではないでしょうか。私自身も震災の様々な記憶を思い起こしながらシンポジウムに参加しました。

1人目のシンポジスト水田恵三先生(尚綱学院大学)は、原発の被害にあわれた浪江町の方たちを対象にした調査結果を報告して下さいました。質問紙調査から開始したところ、住民の方から「大変なのはわかっているだろう。ともかく話を聴きに来てほしい」という要望があり、インタビュー調査に移行したのだそうです。いくつかの事例を、復興曲線と重ね合わせて紹介して下さいましたが、印象深かったのは、先生が「仮設住宅暮らしで苦勞をしながらも、生活の中に楽しみを見出し、前向きに生きていらっしゃる方たち」に焦点をあてていたところでした。そして、前向きになれるようになったきっかけのほとんどが、仮設住宅での様々な活動や人との関わりだったといえます。住まいがあることは心の安定につながるが、それでも借り上げ住宅に住んでいらっしゃる人たちよりも仮設住宅の人たちの方が、逆にこころの安定が高いのだという先生のご報告をきいて、仮設住宅内でのコミュニティ形成がこころの安定に大きく寄与していることがわかりました。もちろんうまくいかなかった事例もあるのですが、それでも困難な状況下ほど、人と人との結びつきや支え合いがより必要になるのだらうと思いました。

2人目に登壇された松井豊先生(筑波大学)は、災害救援に携わる人たちのストレスに関する調査結果として、震災から年月が経過しても看護師や消防士のかたりの人たちが外傷性ストレス反応を抱えたまま勤務を続けられていること、被災地の公務員の多くの方たちが、住民から怒られたり非難されたりした辛い経験を持っていることなど、被災地を助け、支える立場の人たちもまた過酷な状態で職務に従事されていることをお話して下さいました。この問題に対して先生は、同業者による傾聴ボランティア(ピアサポート)、グループミーティングなど様々な支援策を実践され成果を上げていらっしゃいます。先生の取り組みの中から浮き彫りになったのは、例えば、差別や風評被害にみられるような被災地と他地域との分断、避難場所の違いによる家族の分断といったように、あちらこちらで分断が生じていることです。松井先生はこれを「こころの分断」と呼んでいらっしゃいました。「こころの分断」は同じ職場で働く同僚同士の間にも、避難した人と残った人の分断、補償や賠償の違いから生じる分断のような形で、心底で生じているのです。「こころの分断」を解消させ和解させることは、現段階ではまだ難しいとのこと、震災の残した傷跡の深さを改めて感じさせられました。

3人目のシンポジストである三浦麻子先生は、被災地の東北三県と首都圏、京阪神の人たちを対象にしたインターネットによるパネル調査から、被災地の食品に対する態度を規定する要因について報告して下さいました。2011年の第1波調査から、以後1年ごとに実施されてきた第4波までの調査結果によりますと、驚いたことに、放射線地域の食品を忌避する態度、放射線の影響に関する不安の程度は4回の調査を通してほとんど変わっていない、つまり時間経過に伴って下がっていないのだそうです。三浦先生は二重過程理論に基づき、感情的、直感的に形成された食品忌避態度が、食品の安全性や放射能に関する正しい知識を持つことで低減される可能性を考えられていました。結果から、放射性物質などの人体への影響に関して正しい知識を持っている人は被災地の食品忌避態度が低く、「自分は放射に関する知識を持っている」という主観的評価が高いと、むしろ食品忌避態度が高くなることが示されていました。すなわち「知っていること」は食品忌避態度を和らげるけれども、「知っているつもり」であることは逆に食品忌避態度を強めやすいということです。やはり、食品の安全性に問題はないという、正確な知識を粘り強く情報発信していくことが大切なわけです。

東日本大震災の直後、私も個人としては被災地のためにできることを少しはやりましたが、心理学に携わるものとして何ができるのかを考えたときに、ひょっとすると被災地で求められる心理学は専ら臨床心理学なのではないかと勝手に考えておりました。浅はかなことでした。年月が経過し「被災地のために何かしなくては」という焦りもだんだんと薄れてきていました。けしからんことです。シンポジウムを拝聴して、社会心理学は立派に被災地支援をしている、研究そのものが被災地支援になり得るということに、改めて気づかされました。水田先生の調査は、それ自身が浪江町の方たちを元気づけているのではないのでしょうか。松井先生のご研究は、被災地を支える方たちを更に支えるという、被災地支援そのものです。三

浦先生のご研究では、世間一般の食品忌避態度を低減させることで、結果として被災地支援につながります。直接的か間接的か、現地にいるか離れているか、など被災地との関わり方は様々に異なっていますが、研究それ自体が被災地支援として貢献しうるものになっているのには変わりありません。

被災地支援につながる研究においては、具体的な解決方法を呈示するところまでが、特に求められることでしょう。実はこのシンポジウムでも、始めに司会の飛田操先生(福島大学)から、「シンポジストの先生方には、問題解決の手がかりの提示までをお願いしてある」とのお話がありました。実際に飛田先生は、3人の先生方に「具体的に私たちに何ができるのか」という質問を一貫して投げかけていらっやっったと思います。飛田先生はご自身が福島で被災され、その後も常に福島にあって「自分にできることは何か？」と自問自答して来られたのだと思います。震災から4年目の今日、被災地に関わる様々な問題があるということを示すことができたとしても、では、どうやったらそれを解決できるのか、自分に何ができるのか・・・、それこそが知りたいと願うのは、被災地の方たちも、研究者も、世の中の人たちも同じなのだろうと思います。シンポジストの先生方は震災後から今日までそれを実践してこられたということで、頭が下がる思いがいたします。

シンポジウムをきいて「被災地のために何かしたい」という気持ちを強めたのは私だけではないでしょう。幸いなことに、研究者かどうかに関係なく、誰にでもすぐできることがあります。松井先生がフロアからの質問に答えて、開沼博氏の『はじめての福島学』から「買って、行って、働け」という言葉を紹介してくださいました。被災地のために何かしたいなら・・・被災地の生産物を買って、現地に行って(観光でかまいません)、そして現地でも働いて下さい(人手が足りないのです)、ということなのです。働くのは、すぐには難しそうですが、買う、行くならできそうですね。はい、私も早速、酒屋に走って福島のお酒を買ってまいりました。参加記も無事書き終えられたようですので、この辺でちょっといただいてみます。…うん、美味しい！

(かざま ふみあき・十文字学園女子大学)



写真提供:(株)応用社会心理学研究所

お知らせ

2015年9月7日に、名誉会員の廣田君美先生(関西大学名誉教授)が逝去されました。廣田先生は、特に集団についての心理学的研究で大きな業績をあげられ、1993年4月から1997年3月まで日本社会心理学会の会長を務められるなど、長きにわたり日本の社会心理学界を牽引して下さいました。謹んでお悔やみ申し上げます。

広報委員責任編集コンテンツ(1)「論文をたくさん書く」

清水裕士

最初に断っておかなければならないのは、この企画が「大いに自戒を込めた」ものであるということだ。この企画タイトルをみた私の共同研究者達が、苦々しい顔でこれを読まれていることは想像に難くないが、それでも私の考え方が180度とまではいかないまでも132度ぐらゐは変わった本である以上、紹介しないわけにもいかない。

それは、SNSで話題になっていたことで知った『できる研究者の論文生産術 どうすれば「たくさん」書けるのか』という本である。これは実は訳書で、アメリカの社会心理学者である Paul J. Silvia が書いたものである。もとのタイトルは『How to Write a Lot』である。タイトルからして直球である。



この本は、実は私が広島大学にいた頃には知っていたはず(実は次の記事の著者である、当時広大の院生だった川本氏に教えてもらった)だが、その時は「そういう本があるのかー」ぐらいで流していた。しかし、今年度から関西学院大学に移り、自分の新しい研究環境、教育環境を構築しないとイケないタイミングで、この本の訳書が出たのである。なるほど、書かないとイケない論文がたまっている。あ、本も書かないと・・・。SNSでの盛り上がりの中、半分ネタ的に読み始めたのだが、それはもう面白いほど、私がこれまで築き上げてきた「論文を書かないための言い訳」が粉碎されてしまったのだ。

この本では、論文を書かない言い訳を一つ一つ、丁寧に潰してくれる。すべてを挙げる余裕がないので一つだけ紹介しよう。おそらく誰もが言ったことがある「まとまった時間さえとれば書けるのに・・・」という言い訳について、著者は「授業や会議と同じように、執筆時間をスケジュールに入れる」と言ってくる。忙しい大学での生活において「書くため時間」を「見つける」なんてことは、ジャングルの中で珍しい生物を発見するのと同じぐらゐ絶望的なことだ。見つけるのではなく、授業と同じように、あらかじめスケジュールに設置しておけばよい、というわけだ。

「そんなこと言われても、会議や予定が入るし・・・」と有職者の方々は思っただろう。これについても著者は、ご丁寧に3つぐらゐ急な会議や予定を断るためのノウハウを書いてくれている。要は、「執筆時間」は、授業や委員会と同じぐらゐ守らなければならない「すでに入っている予定」にするのだ。仮に週に2コマでも執筆時間を設定すれば、半年で論文は1本書けるだろう。とりあえず、清水には少なくとも木曜3,4コマは会議の予定をふらないでいただきたい。

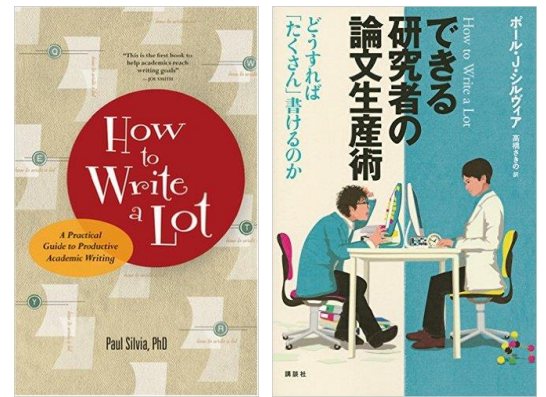
上に挙げた例以外にも、「まだ分析終わってないから書けないし・・・」とか「論文を書くためには文献を読まないし・・・」とか「インスピレーションが湧

いた時が一番いいものが書ける」とか、もう思いつく言い訳はたいい粉々である。そうするとどうだろう、不思議と「あ、書けるかも」と思えてくるのである。

この例だけでもお気づきかも知れないが、この本はすでに職を得た研究者こそ読むべき本である。有職者がもつさまざまな書けない言い訳をつぶし、それだけでなく、書くための勇気をくれるのである。もちろん、現在院生やポスドクで、論文をたくさん書きたい！という意欲あふれる若手の方にもオススメである。

次の記事では、実際に院生時代から『How to Write a Lot』だけでなく、Silvia のもう一つの著書『Write It Up!』についても実践している東大 PD の川本氏に、その内容や成果を紹介してもらおう。若手の人が論文を書き続けるきっかけになればと思う。

(しみず ひろし・関西学院大学)



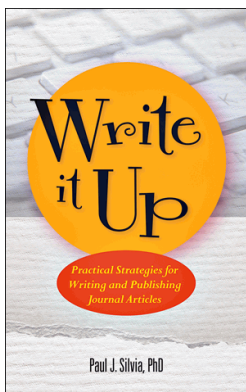
2つの教科書

川本大史

「ある研究者はなぜたくさん論文が受理されるのだろうか？」

この疑問は、修士・博士課程のときに私がよく考えていたものである。社会的排斥研究では、DeWall や Eisenberger の論文をよく目にする。私も彼/彼女のようにたくさん論文が受理されるようになりたいが、なかなかうまくいかない。もちろん研究デザインや分析手法の差もあるだろうが、何か他の原因があるような気がしていた。論文執筆はゴール(accept)の見えない複雑で長い迷路のようだった。ずっと悩んでいたが、2つの本が疑問に対する答え—「習慣化」と「論文の公式」—を提供してくれた。

1つ目は、Silvia (2007)の *How to write a lot: A practical guide to productive writing* である。この本では、(1)時間を割り当てる、(2)記録をつける、(3)優先順位をつける、ことで執筆作業を「習慣化」することの重要性を述べている。たくさん論文が受理されている人は、たくさん時間論文を書いている。答えは予想以上にシンプルだった。やる気があるときに一気に書くのではなく、やる気の有無にかかわらずコツコツ書く。この本を読んでから毎朝規則正しく論文を書くようにしている。そして、実際に論文を書きあげることができた。たとえば、社会的排斥が引き起こす個人内・個人間過程について社会心理学・社会神経科学の観点からまとめたレビュー論文 (Kawamoto et al., 2015)は、構想から3ヶ月で投稿することができた。「習慣化」を知っていなければ、もっと時間がかかっていたかもしれない。しかし、他の論文は必ずしも受理にはつながらなかった。たくさん論文を書く人のもう1つの秘密—「論文の公式」—を知らなかったためである。



2つ目は、Silvia (2014)の *Write it up: Practical strategies for writing and publishing journal article* である。この本では、序論の書き出し、論文パターン(“①Which one is right?”, “②Here’s how this works”, “③Things that seem similar are different [or vice versa]”, “④Here’s something new”)ごとの序論テンプレート、考察で書くべきこと・必要があれば書くことなどがまとめられている。たくさん論文が受理される人はたくさん時間論文を書いているのに加えて、「論文の公式」を知っている。特に、論文パターンは私のこれまでの論文を振り返るとどこかにあてはまり驚いた。たとえば、排斥されている最中の前部帯状回背側部の活動が、社会的排斥に対する反応か予期違反に対する反応かを検討した研究は①にあてはまる(Kawamoto et al., 2012)。①は対立があるため面白い。排斥されている最中の認知・感情・動機の変化、排斥された後に生じる所属調整の心理生理学的基盤を検討した研究は②にあてはまる(Kawamoto, Nitono, & Ura, 2013, 2014)。②は不確かさがあるため面白い。排斥に対する敏感さについて、進化理論と拒絶感受性理論の調和と差異化を目指した研究は③にあてはまる(Kawamoto et al., in press)。③は対立と驚きがあるため面白い。排斥された後に笑顔に対して攻撃性が高まる場合があることを示した研究は④にあてはまる(Kawamoto, Araki, & Ura, 2013)。④は発想自体が面白いが、最も難しい。実際に受理されるまでに苦労した。論文パターンごとに序論のテンプレートがあるということを知っていれば、査読者に論文のメッセージがより伝わっていたかもしれない。この本を読んでから、執筆作業がより楽しくなり、効率も上がった。本の効果は査読コメントの変化にもあらわれた。メッセージが明確に伝わるようになり、文章・段落間のズレを指摘されることが少なくなった。なお、私のHPでもう少し詳しい本の紹介をしている(<http://tkawamoto.web.fc2.com/writing.html>)。

2つの「教科書」は、執筆作業にエネルギーと地図を与えてくれる。道筋—「論文の公式」—がわかり、進む力—「習慣化」—が加われば、ゴールに到達しやすい。長い道のりの先には、世界中の研究者が手を広げて待っているかもしれない。私の論文は、幸運なことに DeWall や Eisenberger のグループに引用していただいた。自分のやってきたことが、大きな研究枠組みの中で少しは役に立てた気がしてうれしかった。

(かわもと たいし・東京大学/学振 PD)

注) 広報委員責任編集コンテンツでは、毎回1名の広報委員が企画をまるごと担当します。記事は、[広報委員会 Web サイト](#)でスピノフ公開しています。次号は「単著が出るまで」(担当:尾崎由佳)を予定しています。お楽しみに。

会員異動 (2015年6月20日~9月16日)

入会

《正会員》

・一般会員

相川康弘(法務省東京拘置所分類部就労支援スタッフ)、入江智也(北翔大学保健センター専任カウンセラー)、奥田達也(東海学園大学教育学部教授・学部長)、河野梨香(桜美林大学健康福祉学科学部非常勤講師)、小西智一(秋田県立大学生物資源科学部准教授)、竹下里穂(所属なし)、富高智成(京都医療科学大学医療科学部放射線技術学科学部助教)、中井周作(東北工業大学ライフデザイン学部安全安心生活デザイン学科学部講師)、深田仁美(墨田区役所)、福島和郎(目白大学社会学部非常勤講師)、藤田浩之(日本放送協会大阪放送局広報部副部長)、湊上康幸(東京少年鑑別所首席専門官)、松尾和弥(甲南大学大学院人文科学研究科)、松並知子(武庫川女子大学共通教育部非常勤講師)、柳 学済(名古屋大学情報文化学部研究生)、若林宏輔(立命館大学文学部准教授)、SMITH Adam(神戸大学大学院人文学研究科心理学研究室学術研究員)

・大学院生

石川咲子(静岡大学大学院人文社会科学研究科)、一関祥佑(大正大学大学院人間学研究科臨床心理学専攻)、今井昭仁(神戸大学大学院人間発達環境学研究科)、鶴子修司(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)、内海裕里花(福島学院大学大学院心理学研究科臨床心理学専攻)、江川伊織(東京大学大学院総合文化研究科広域科学専攻生命環境科学系)、榎本かおり(東京大学大学院人文社会系研究科)、大浦真一(甲南大学大学院人文科学研究科)、大高実奈(法政大学大学院人文科学研究科心理学専攻)、小田喜理江(東洋大学大学院社会学研究科社会心理学専攻)、越智美早(神戸大学大学院人文学研究科心理学研究室)、金 賢美(早稲田大学大学院教育学研究科)、木村真利子(立正大学大学院心理学研究科対人・社会心理学専攻)、久禮まゆ(同志社大学大学院心理学研究科)、佐藤亜美(弘前大学大学院教育学研究科)、佐藤広夢(青山学院大学大学院国際政治経済学研究科国際コミュニケーション専攻)、式部真奈(北海道大学大学院文学研究科)、篠原亜佐美(京都大学大学院教育学研究科)、清水計法(大阪大学大学院人間科学研究科)、下津佐綾(東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース)、白砂優希(京都大学大学院教育学研究科教育認知心理学講座)、杉山高志(京都大学大学院情報学研究科社会情報学専攻)、関森真澄(信州大学大学院人文科学研究科地域文化専攻社会心理学領域)、立川経康(法政大学大学院人文科学研究科)、館松詩織(早稲田大学大学院文学研究科)、樽井この美(名古屋大学大学院教育発達科学研究科)、永富まどか(明治学院大学大学院心理学研究科)、中村磨奈(静岡大学大学院人文社会科学研究科)、西村光一(日本大学大学院文学研究科)、根田貴弘(神戸学院大学大学院人文学部人間文化学研究科心理学専攻心理系)、平岡大樹(京都大学大学院教育学研究科)、平山いづみ(東京大学大学院人文社会系研究科)、松ヶ崎溪介(神戸大学大学院人文学研究科社会動態専攻)、三好理央(追手門学院大学大学院心理学研究科)、村田遊哉(埼玉大学大学院文化科学研究科文化構造研究専攻)、村中昌紀(日本大学大学院文学研究科心理学専攻)、森山加菜(東京女子大学大学院人間科学研究科)、戎 夢婷(筑波大学大学院人間総合科学研究科)、和田洋人(青山学院大学大学院教育人間科学研究科)、渡辺里絵(東京家政大学大学院人間生活学総合研究科臨床心理学専攻)、KOSTYUK Evgeniya(神戸大学大学院国際文化学研究科)、LIU I-Ting Huai-Ching(京都大学大学院人間・環境学研究科)

《準会員》

小酒井基文(放送大学教養学部学部生)、中山賢二(武蔵野大学通信教育部人間科学部人間科学科学部生)

退会

廣田君美(物故)、伊藤ゆかり、菊島正浩、久保田はる美、境野友美、津村俊充、堀井秀之、松本 孚、山岸明子、POTHISITHIPORN TIPPAYARAT

所属変更

竹内真純(帝京大学女性医師・研究者支援センター研究員)、市村美帆(目白大学)、小松さくら(中央大学機構助教)、中村祥子(東洋大学人間科学総合研究所奨励研究員)、福沢 愛(関西学院大学社会心理学研究センター客員研究員)、田戸岡好香(東京大学・日本学術振興会特別研究員)、三浦絵美(Columbia University)、橋本剛明(京都大学霊長類研究所研究員)、山岡あゆち(東京少年鑑別所)、川本大史(東京大学大学院総合文化研究科・日本学術振興会特別研究員(PD))、福田哲也(上智大学総合人間科学部心理学科特別研究員)、松木敦志(学校法人立教学院)、久木田純(関西学院大学学長直属・教授)

編集後記

第56回大会開催間近。500名を超える予約参加者があり、談論風発が今から楽しみでなりません。一方で、公開シンポジウムのご来場者は55名。単純な比較はできませんが、考えさせられる数字ではないでしょうか。広報委員会では、『社会心理学研究』第31巻より、掲載論文をダイジェストした「論文ニュース」の公開を始めました。震災特設サイトで試みた取り組みを定常化するものです。皆さんも是非ご高覧・ご意見を。(asarin)